

第7-2号

耕人

『耕人塾』

塾長 木村 民男

平成30年6月16日(土)

「サムシング・グレート」から学ぶこと

耕人塾も第7期の2回目を迎えました。「人間力」を磨くために連続して学んでいる塾生も多いので、今回は少し難しい話をします。「サムシング・グレート（偉大なる何ものか）」とは、生命科学研究者で筑波大学名誉教授の村上和雄氏が30年ほど前から使っている言葉です。昨年、石巻専修大学での「キャリア開発」でこの問題を取り上げ、人間として生きていることの奇跡や自他の尊重について講義しました。村上先生は、生命の神秘さと真摯に向き合った60年の研究の中で生命遺伝子の神秘さについて次のように話しています。

そもそもヒトの設計図は32億もの科学文字で書かれています。これを例えば本にすると、1ページ千語で千ページの大百科事典が3,200冊分に匹敵するほどの分量になります。その膨大な情報が書き込まれたDNAの存在によって、私たちはこうして生かされているのです。しかもこの遺伝子暗号は、顕微鏡で一億万倍に拡大しても読めないような超微細な文字で書かれています。しかも、この万卷(まんがん)の書物に匹敵する情報が誰かの手によって書かれたということです。それが人間でないことはすぐ分かります。では、それは一体誰によって書かれたのでしょうか。人間を遥かに超えた何ものか、つまりサムシング・グレートによって書かれたとしたか、言いようがないというのが私の実感でした。それゆえに生命の神秘を司(つかさど)る存在を、サムシング・グレートと私は呼ぶことにしたのです。サムシング・グレートがどんな存在なのか、具体的なことは私にもわかりません。しかしそういった存在を想定しなければ、小さな細胞の中に膨大な生命の設計図を持ち、これだけ精妙な働きをする生命の世界を当然のこととして受け入れることは、私には到底できないことでした。

進化生物学者の木村資生(むらむら)氏によれば、この宇宙に一個の生命細胞が生まれる確率は、一億円のお宝くじが百万回連続して当たるくらいの確率だそうです。となれば、私たちの存在はほとんどなく「有り難い」ものだということができるでしょう。私たちの身体には、約37億個の細胞が存在し、お互い助け合いながら、喧嘩することなく調和を保って生きている。これは本当に不思議なことです。それだけに、我々は大自然の不思議な力で生かされているという側面を決して忘れてはならないと思うのです。

村上先生の言葉から、改めて生命の神秘さに驚くと同時に、だからこそ自分という人間を大切にすると同時に、他人をも大切にしなければならないのだということに気付かされます。自分が存在しているということは、自然も含めてすべてのものに生かされているのだと思います。『耕人塾』で目指している「人間力」を磨き地域社会に貢献することも、実践事項である「あいさつ・清掃・ゴミ拾い」もこのような精神が原点になっています。

大谷選手の振る舞い称賛

河北新報(H30.6.5火)「声の交差点」に掲載された札幌市の萩野義彦さん(75歳)の文章を紹介します。「米大リーグ、エンゼルスの大谷翔平選手は二刀流で活躍するとともに、礼儀正しい振る舞いで、野球ファンをとりこにしています。5月5日、敵地シアトルで行われたマリナーズ戦の試合前練習では、マリナーズファンがブルペンに落としたボールを拾いに行き、サインまでしてプレゼント。前日に浴びたブーイングの嵐を、感謝と称賛の拍手に変えてしまいました。バッターボックスに入る時は審判に会釈、フォアボールで出塁する時にはバットを丁寧に置く。ボールボーイにも感謝の態度を表す・・・など、彼の礼儀正しい振る舞いは数え切れないほどです。(以下略)」大谷選手の清々しい姿は多くの人の心を動かしているのですね。私たちも・・・